

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 野菜

発行日 平成22年 8月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/>」

施設果菜類	草勢維持と障害果の発生防止
露地きゅうり	摘葉と病害防除の徹底、台風への備えも万全に
雨よけほうれんそう	適切な品種への切り替え、秋雨・台風への備えを万全に
露地葉茎根菜類	収穫率向上のための適切な管理と病害虫防除

1 生育概況

- (1) きゅうりの露地栽培では収穫ピークを過ぎたところですが、成り疲れや土壌乾燥の影響で草勢が低下している圃場がみられます。また、病害虫では褐斑病や炭そ病、べと病、ホモプシス根腐病、ハダニ類の発生が広くみられ、枯れ上がりに繋がっている圃場も散見されます。施設抑制栽培では徒長気味の圃場も散見されますが、生育は概ね順調です。
- (2) トマトの雨よけ栽培は高温経過により果実が小玉傾向にあるほか、軟化等の果実品質の低下や落花により着果数が減少している圃場もみられます。
- (3) ピーマンは高温経過による尻ぐされ果や日焼け果の発生や、成り疲れにより草勢が低下している圃場が目立ちます。
- (4) 雨よけほうれんそうは7月以降の高温の影響もあり、生育遅延・停止や株の枯死等がみられており、収穫量の減少が続いています。
- (5) レタス、キャベツでは、7月の降雹や集中的な多雨とその後の高温により生育遅延や小玉傾向となり、腐敗性病害もみられます。

2 技術対策

(1) 果菜類(トマト・ピーマン)

ア 施設果菜類

今後秋雨前線が活発になるとハウス内の湿度が上がりますので、十分な換気を行うことが重要です。また、病害虫の防除にはくん煙剤を使用する等、湿度を上げない工夫が必要です。

気温が低下してくることから、施設果菜類では夜間の保温が必要となります。最低気温がピーマンでは17℃、トマトでは10℃の時期をめどに保温を開始します。

イ 雨よけトマト

裂果の発生を抑えるため、土壌水分の急激な変化を起こさないよう少量多回数のかん水管理とします。ハウス外からの雨水の横浸透にも留意し、ハウス周囲の明きよを再確認しましょう。

また、主枝摘心後は半放任とし、果実に直射日光が当たらないようにします。

病害では今後、灰色かび病や葉かび病、疫病の発生が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、防除に努めてください。



写真：通常未収穫となる果実でも全摘葉と保温管理で収穫可能となる。

本年は春先の低温や夏期の高温経過の影響から、例年より収量が少ない圃場もみられますが、少しでも収量を確保するために、通常栽培終了時に未収穫となる果実を収穫することも検討しましょう。

方法は、9月末から10月初めまでの間に写真のように葉を全て摘んだ後、霜が降りる前につる下げし、不織布をべたがけします。低温や霜の影響が回避され、収穫可能な果実が増加するとともに、裂果の発生を減らすことができます。

ウ ピーマン

ハウスピーマンの主枝摘心は9月初めまでに実施します。施設・露地とも尻腐果等はおさまつてくるものと思われませんが、気温の低下とともに黒変果の発生が増えてきますので、ハウス栽培では保温管理に努めてください。

(2) 露地きゅうり

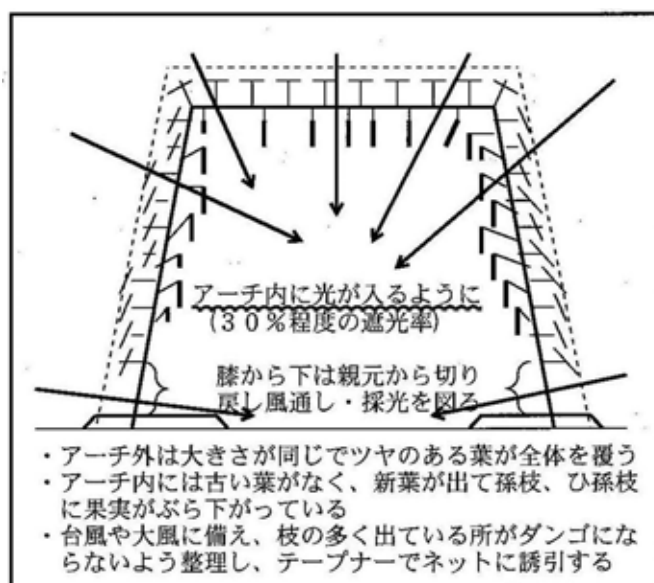
草勢低下が著しい圃場では、不良果の摘果に努めて草勢回復を図るとともに、摘心はアーチの外側に飛び出しているところを指先で止める程度にとどめます。

ただし、強風により側枝がもまれ、茎葉の重なり合っている部分は、混み合って病害虫の発生源となる恐れがあるため、適度に摘心する必要があります。

摘葉は、生育後半でも太陽光がアーチ内部に十分入り込み、新葉が常に発生するように右図を参考に行います。

さらに、草勢回復には液肥を薄い倍率で葉面散布することや土壌かん注も有効です。気温も徐々に低下しておりますので、追肥は速効性の資材を利用するようにします。

病害では褐斑病、炭そ病、べと病に効果のある薬剤を中心に選択し、古葉や病葉の摘葉作業と併せながら効果的な防除に努めます。特に、アーチの上部で病害がまん延しないように努めてください。



(3) 雨よけほうれんそう

これまでは高温の影響でさまざまな生育障害が多くみられました。残暑が続けばしばらくこの傾向は残りますが、今後気温の低下に伴いほうれんそうの生育には適した条件となります。

品種によっては、高温で徒長したり、気温の低下により生育が大幅に遅れる場合がありますので、各地域で示されている作付品種体系に従い、適期に適切な品種をは種しましょう。

萎凋病等の土壌病害が多くみられた圃場では、次年度以降の対策として土壌消毒の実施を検討しましょう。初夏に土壌消毒する従来の方法以外に、作付終了後の晩秋に土壌消毒を行う方法もあります。具体的な方法については、最寄りの農業改良普及センター等にご相談下さい。

気温の低下や秋雨の影響でハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生がみられることもあります。抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して病害が発生しにくい環境にしましょう。

台風の影響を受けやすい時期になります。屋根ビニールが破損したり、ハウス内に雨水が流入するのを防止するためビニールの破れの補修、ハウス周りの排水対策を再度確認します。

(4) 露地葉菜類

ア ネギ

生育停滞の影響で管理作業がやや遅れている圃場が見られます。最終土寄せをした後の日数が長くなると葉鞘部のしまりが悪くなる等して品質が低下します。収穫の20～30日前を目安に最終培土を行きましょう。

ネギアザミウマの被害がやや多めです。黒斑病やべと病、軟腐病の発生も見られてきています。収穫が近くなってからの病虫害被害は品質の低下に直結しますので、早めの防除を心がけましょう。なお、農薬の使用にあたっては収穫前日数を確認して適切に防除しましょう。

イ キャベツ・レタス

高冷地の定植作業はほぼ終了しています。今後は収穫率が向上するように生育中の栽培管理をしっかり行い、**適期収穫により収穫率の向上を目指しましょう。**

まとまった降雨により小玉傾向で腐敗性の病害も多くなっていますので、圃場排水を確認し、降雨後の防除が円滑に行えるようにしましょう。また、収穫終了後の廃棄株や残渣は放置せず、病虫害の発生源とならないように注意しましょう。

ウ アスパラガス

普通栽培および立茎栽培のアスパラガスは、地上の茎葉部に存在している養分が地下部へ徐々に移行する時期となります。これからの追肥は養分転流の妨げになりますので行いませんが、茎葉部を健全に保つことが株養成には重要です。倒伏防止対策をしている場合には、台風などに備えてもう一度ネットや誘引線の確認を行きましょう。

伏せ込み促成アスパラガスの株養成においても、茎葉部を健全に保つことが収量向上につながります。病害を防除し、倒伏させずに自然に茎葉が黄化するよう心がけましょう。



フラワーネットを利用して倒伏防止している圃場の例